

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	東 晃平
論文担当者	主査 小山 英則
	副査 新村 健
	副査 坂口 太一
学位論文名	Plasma Renin Activity variation following admission predicts patient outcome in acute decompensated heart failure with reduced and mildly reduced ejection fraction (駆出率が低下した急性非代償性心不全入院患者において血清レニン活性の変動は患者の予後を予測する)
論文審査の結果の要旨	
<p>入院時の血漿レニン活性 (PRA) 値は、急性心不全患者の予後予測因子であることが報告されているが、入院中の PRA 値の変化 (ΔPRA) が予後と関連するかどうかは不明である。</p> <p>東 晃平氏は左室駆出率 50%未満の急性心不全患者の予後に対する ΔPRA の予測的影響を単施設後方視的コホート研究により調査した。対象は連続した入院急性心不全患者 116 例のうち入院時および退院時に PRA を測定した 85 例で、主要アウトカムは、心血管死と HF 再入院の複合とした。入院時と比較して、退院時の PRA 値は有意に上昇していた。入院時の PRA 値で順位付けした 3 次群では、PRA 値が高い、中、低の順に予後不良の傾向が見られた ($p=0.07$)。逆に退院時の PRA 値は予後を有意に区別し、高、低、中の順で予後不良であった ($p=0.026$)。一方、ΔPRA でランク付けした 3 分位群では、「最小変化」、「減少」、「増加」層の順に予後が悪化し、Cubic splines 解析でも同様の傾向がみられた。</p> <p>本研究により左室駆出率の低下した急性心不全患者において、血漿レニン活性の変化が、患者の予後の予知因子となることが初めて示された。予後と関連する ΔPRA 閾値の存在の可能性が明らかでない事、なぜ十分に除水されたことを示す ΔPRA 上昇群の予後が悪いのかが明らかでないことなど、今後の研究進展に期待する点はいくつがあるが、ΔPRA をもとにした入院中の治療介入の調整の可能性など、新たな治療戦略に道を開く研究成果であり、学位論文に資すると判断した。</p>	